

# 死後交信と靈的変容体験

## After-Death Communication and Spiritually Transformative Experience

大門正幸

OHKADO Masayuki

"Spiritually transformative experience" involves various phenomena such as near-death experiences, death-bed vision experiences, shared near-death experiences, enlightening, mystical experiences, the recall of past lives, and meeting with deceased people, the so-called after-death communication, ADC. One of the notable common characteristics of these experiences is that they often have profound and long-lasting effects on experiencers which can be called life-changing. In this article I will report a case of after-death communication with such effects on the experiencer. In the spirit of Ohkado (2018) and Ohkado and Greyson (2018), I will also show that the Life Changes Inventory-Revised (Greyson and Ring, 2004) can be a potentially promising tool for measuring the effect of after-death communication as an example of spiritually transformative experiences.

**Keywords : After-Death Communication, Medium, Survival of Consciousness, Spiritually Transformative Experience (STE), Twins**

### 1. はじめに

人生観を一変させるような現象の総称として靈的変容体験 (Spiritually Transformative Experience, STE) という用語が使われるようになり、臨死体験やお迎え体験、臨死共有体験、悟り、死後交信 (故人との邂逅)、神秘体験、過去生記憶の想起といった様々な体験を、互いに切り離されたものとしてではなく、包括的に記録・調査・研究しようという流れが強まっている<sup>1</sup>。大門 (2018) では、子どもの語った「胎内記憶」が契機となって生じた靈的変容体験について報告したが<sup>2</sup>、本稿では霊能者 (ミディアム) を通した死後交信

---

<sup>1</sup> 2009年には American Center for the Integration of Spiritually Transformative Experience (ACISTE) が、2012年には Eternea: The Convergence of Science & Spirituality for Personal & Global Transformation が設立された。また同年には靈的変容体験の代表的な研究者の一人である Nancy Clark が *Divine Moments: Ordinary People Having Spiritually Transformative Experiences* を出版している。さらに2012年、2013年、2014年には、International Association for Near-Death Studies の機関誌である *Journal of Near-Death Studies* が ACISTE の大会に関する報告を特別号として出版している。

<sup>2</sup> ここで言う「胎内記憶」とは文字通り胎内にいる時の記憶 (「狭義の胎内記憶」) に加えて、「過去生記憶」、「中間生記憶」、「誕生時記憶」を含んだものである。「胎内記憶」という用語・概念を巡

によって誘発された霊的変容体験、具体的には1983年9月に起きた大韓航空機撃墜事件で奥様とご子息を亡くされた武本昌三氏の体験、について報告する。

## 2. 自然発生的な死後交信

死後交信は、我が国では特に東日本大震災以降に公にされることが増えたが（たとえば、奥野, 2017; 金菱, 2018; パリー, 2018）、体験自体は国や地域を問わず古くから数多く報告されてきた現象であり、それを裏付けるデータも存在する。15カ国で行われた Human Values Survey の結果を示した Haraldsson and Houtkooper (1991) によれば、調査対象国の9%～41%が死後交信の体験があると報告している<sup>3</sup>。

これらの数値はあくまで報告者の主観的な体験に基づくものだが、HaraldssonとHoutkooperによる研究の100年以上前に、死者との邂逅体験が、ある程度の客観性を持っていることを実証した研究が発表されている。すなわち、心霊科学協会 (Society for Psychical Research) の主要メンバーによってなされた770ページにおよぶ報告、*Phantasms of the Living*である。そこでは (i) 死者との邂逅体験が生じた時刻、(ii) その体験が実際に生じたことを示す第三者の証言、(iii) 故人の死亡時刻、の三点を照合し、ある人物の死亡時刻、あるいはその時刻に近接した時間内にその人物の幻影（いわゆる霊体）との邂逅があったと考えられる830の事例が報告されている（Gurney et al., 1886、ただし830事例の中にはいわゆる生き霊との邂逅体験も含まれる）。

## 3. 霊媒を通した死後交信

死後交信には前節で見た自発的なものの他に、故人に関する情報を入手することができる霊媒を通したものがある。そのような霊媒が語る内容の検証については、心霊科学協会がその設立当初から行っており、本人が知るはずのない、故人に関する情報を的確に入手できる霊媒が存在しているという事実は確立されていると言える<sup>4</sup>。

さらに1990年代以降はアリゾナ大学のGary SchwartzやWindbridge InstituteのJulie Beischelによって医学分野で標準的な盲検法を用いた霊媒研究がなされており、霊媒の能力の存在は実験を通した研究においても立証されている（Beischel & Schwartz, 2007）。

このような事実があるからこそ、故人との再会を求める者は霊媒の元を訪れるのであり、霊媒を通して故人と再会できたとする多数の報告がなされ（マーチン、ロマノウスキ

---

る問題については大門 (2020) を参照。

<sup>3</sup> 一番低い9%はノルウェーの数値、一番高い41%はアイスランドの数値である。その他の国については以下の通り：デンマーク (10%)；オランダ (12%)；フィンランド (14%)；スウェーデン (14%)；スペイン (16%)；アイルランド (16%)；ベルギー (18%)；韓国 (23%)；フランス (24%)；イギリス (26%)；西ドイツ (28%)；アメリカ (30%)；イタリア (34%)。

<sup>4</sup> しかし、その事実の説明としては、(i) 故人の意識（いわゆる霊）との交信によってもたらされたものとする死後存続仮説 (survival hypothesis) の擁護者と (ii) 霊媒が超感覚的知覚を用いて生者の意識内にある情報や何らかの形で記録された情報を入手したものであるとする生者サイ仮説 (living agent psi hypothesis) の擁護者との間で長い論争がある。この点については、Sudduth (2016) を参照のこと。

一、1991; 塩田, 2008など)、また、霊媒をグリーン・ケアとして有効活用しようという提案もなされているのである (Beischel et al., 2014)。霊媒を通して故人との再会を果たしたと信じる者たちの体験の多くは世界観が一変する霊的変容体験の一種とみなすことが可能であり、霊的変容体験を測る尺度を用いてその体験を分析することは体験の理解に有効であろう。

#### 4. 武本昌三氏の体験<sup>5</sup>

1930年大阪に生まれた武本氏は、1941年鉄鋼圧延技術者であった父親の仕事の関係で仁川に移った。1945年2月、肋膜炎で死を待つばかりの状態となったある日、燦然と輝く仏から見守られるという神秘体験をする。父親が奇跡的に入手した解熱剤によって回復した武本氏は敗戦後の1946年2月、引き揚げで仁川から釜山、仙崎（山口県）を經由して、空襲による焼け跡の広がる大阪に戻った。1950年、東京外国語大学のロシア学科に進学し、1955年4月から高校で教鞭を取り始めた。1957年、アメリカの州立オレゴン大学給費奨学生として渡米。1959年に同校で修士号 (Master of Education) を取得した。帰国後、中京大学、室蘭工業大学、続いて小樽商科大学で教鞭を取る。小樽商科大学在職中にオレゴン大学 (1973年-1975年) とアリゾナ大学 (1982年-1983年) とノースカロライナ州立大学 (1983年) に客員教授として赴任している。この時点までの武本氏は共著を含む三冊の著書、38編の論文・研究ノート・評論を発表しており、英語学・比較文化論を専門とする気鋭の研究者・教育者として活躍中であった。

1983年8月、武本氏の奥様とご子息が氏とご息女の滞在するローリーを訪れた。この時、ご息女は氏が客員教授を務めるノースカロライナ州立大学に通う大学生、ご子息は氏の母校でもある東京外国語大学の3年生であった。ご家族の4人で三週間余りを過ごした後、奥様とご子息は帰国の途に就いたが、その時に利用した大韓航空のボーイング747機がソビエト連邦の戦闘機に撃墜されるという悲劇に見舞われた。米ソ冷戦を背景とし、269名の犠牲者を出した歴史的的重大事件の遺族となった武本氏は「悲嘆の極限状態におかれたような日々」を送りつつ、1984年に組織された「大韓航空機事件の真相を究明する会」の代表理事となり、7年にわたって事件の真相究明運動に力を尽くした<sup>6</sup>。

一方で奥様の知人の霊能者やS教団およびT教団の霊能者によるリーディング、宗教書や臨死体験の記録等の閲読を通して、武本氏は意識の死後存続の可能性について想いを馳せるようになり、1992年、ロンドン大学客員教授としてイギリスを訪れた際に大英心霊協

---

<sup>5</sup> 武本氏の体験については『天国からの手紙—愛する家族との18年間の霊界通信』(武本, 2011) や氏の web ページ (<http://www.takemoto-shozo.com>) に詳述されている。本節の記述はこれらに基づいている。ただし、氏の業績については武本 (2019) を参考にした。

<sup>6</sup> 大韓航空機事件の真相を究明する会の研究成果は『大韓航空機事件の研究』(大韓航空機事件の真相を究明する会・武本昌三, 1988) として公にされている。会の運動とは独立に武本氏は個人としても新聞や雑誌への寄稿、テレビへの出演を通して真相究明を訴え、1985年には『大韓機撃墜事件—疑惑の航跡』を出版した。また、『APPEAL』という広報誌を毎週発行し、印刷した200枚を国会議員やマスメディアに送り続けたが、それは272号まで続いた。

会 (Spiritualist Association of Great Britain, SAGB) の霊能者の元を訪れるに至った。それまでの経緯を氏は次のように綴っている (武本, 2011, pp. 194-196)。

私は、一九九一年春の渡英の際に、『シルバー・バーチの霊訓』の(一)と(二)を持っていった。ロチェスターの家で少し落ち着いたころ、七月に初めて二冊を読み通し、八月に再び熟読した。訳者の近藤千雄さんとも、何度か手紙のやり取りをするようになった。

私が「大英心霊協会」に会員登録したのも、そのころであった。それからは何度もそこでミーディウムたち(霊媒者、霊媒師)と相對することを予想していたからである。しかし、予約さえすればすぐにでも可能であったミーディウムとの面会を、私はすぐには実現させようとはしなかった。

それには私なりの理由があった。事件後の札幌で、妻の友人で霊能者のAさんから、潔典と富子からの短い霊言を聞かされて以来、私は札幌でも東京でも、できるだけ頻繁にS教団へ行くことに務めていた。霊能者が教主であるという都心に近いT教団にも、何度も足を運んだ。

S教団には三百人近い霊能者がいて、決められた会合の日には、その日の霊能者から霊言を聞くことができることになっていた。私は、何年もの間、S教団のさまざまな霊能者に数十回も向かい合って、必死に霊界の富子と潔典の消息をつかもうとしていた。

しかし、Aさんから聞いた霊言以上に信じられるようなことばは一度も聞くことができなかった。T教団でも、真実に迫るような霊言は聞くことがなかった。なかには、示された霊言が明らかに間違っていて、霊能者の霊能力の低さを感じさせられたこともなかったわけではない。

それでも私は、渡英直前までS教団に通いつづけた。T教団へ行くのも止めなかった。重大な霊界からのことばが、そんなに容易に聞けるわけではないであろう。霊能者の霊能力はもちろん大切だが、受けとめるほうの、こころの状態も大切はずだと、思っていた。

私がS教団で、ほとんど何もつかみ取ることができなかったのは、私が真相究明運動で、アメリカ政府や軍部への強い憎しみを募らせていて、澄みきった素直なころではなかったからであったかもしれない。

私は、S教団やT教団で満たされなかった思いを、渡英後の大英心霊協会に託した。ただ、ロンドンでは滞在が一年に限られている。そしてその一年も、もう半年以上過ぎていた。

そのころ、私はやっとシルバー・バーチの霊訓の重大さに気がつきはじめていた。原文の意味を深く理解するために、大英心霊協会ですり入れたシルバー・バーチの本を自分でも翻訳してみるようになっていた。

渡英前から密かに考えていたが、大英心霊協会は、失った希望を取り戻すための最後のチャンスであった。もうS教団やT教団のように何もつかめなかったではすまされな

い。それでは、富子と潔典を亡くした絶望感からは永遠に解放されなくなってしまいかねないのである。

富子と潔典は死んでしまったままなのか、それとも生きつづけているのか。本当に知りたいことをここから納得して知るのは、一瞬で足りる。

私は、大英心霊協会で霊能者の前に座るのは最後にして、その「一瞬」に賭けた。その前に、霊界の学びを深めて、ここを整え、シルバー・バーチのいうように、霊的真理を受容れるための「魂の用意」をしておかねばならないと思っていた。

このような固い決意で臨んだ1992年1月30日のアン・クーバーによるリーディングで日本でのそれとは異なる確度の高い言葉を聞き、氏は大英心霊協会の霊能者によるリーディングに対する期待を高めていく。そして同年2月11日（武本氏のご令弟の一周忌の日でもあった）、アン・ターナーによるリーディングでご息の名前や足の傷跡のことなどを告げられ、霊界にいるご息子との「再会」を確信した。この時の体験を氏は「何度も足を運んで、霊界からのことばにもいくらかは慣れていたとはいえ、この『再会』は私にとっては全身に震えが走るような大変なことであった」と表現している（武本, 2001, p. 204）。

その後、武本氏は同年3月の帰国までに可能な限り大英心霊協会の霊能者の元を訪れ、数々の通信を受ける。また、帰国後もアン・ターナーとの交流は続き、武本氏はその後もイギリスに出向いて彼女のリーディングを受けた。また、ご息の誕生日である6月5日には、ご息子宛てに武本氏を書いた手紙を受け取ったアン・ターナーが霊界からのメッセージをテープに吹き込んで武本氏に送るというやり取りが、1992年から2007年まで続いた<sup>7</sup>。

武本氏が大英心霊協会では得られなかった、奥様、ご息子との「再会」を確信した大きな理由は、霊能者のリーディングの中に本人が知るはずのない情報が含まれていたからである。氏が著書で明らかにしているそのような情報を表1にまとめておこう。詳しいリーディングの内容については武本 (2001, pp. 198-237) を参考にさせていただきたい<sup>8</sup>。

表1 霊能者のリーディングに含まれていた本人が知るはずのない情報

1	1992年1月30日	アン・クーバー	息子さんの身長は5フィート8インチ(約173センチ)。実際の身長は174センチ
2	1992年1月30日	アン・クーバー	息子さんの容姿・知性について
3	1992年2月11日	アン・ターナー	息子さんの身長は5フィート8インチ(約173センチ)。実際の身長は174センチ
4	1992年2月11日	アン・ターナー	息子さんの容姿

<sup>7</sup> 中断の理由はアン・ターナーの体調不良、その後（2010年8月）の逝去であった。武本氏とのやり取りについては、アン・ターナーの二冊の著書にも記されている（Turner and Turner, 2009, pp. 127-135; 2010, pp. 111-115）。

<sup>8</sup> 氏のご厚意で筆者はリーディングの音声のいくつかを入手、内容を確認させていただいた。

5	1992年2月11日	アン・ターナー	息子さんの名前（キュオーニ、キヨーニ、クヨーニ）。実際はキノノリ
6	1992年2月11日	アン・ターナー	息子さんによれば、あなたの左足にscar（傷跡）がある。
7	1992年2月14日	アン・ターナー	息子さんが霊界に行った時期は1983年、速いスピードで動いている乗り物が突然破壊された。
8	1992年2月15日	ディヴィッド・スマイス	1991年は問題の多かった年。
9	1992年2月15日	ディヴィッド・スマイス	1983年は慟哭の年。
10	1992年2月17日	アムナ・ノーマン	あなたは裁判に巻き込まれている。
11	1992年2月17日	アムナ・ノーマン	あなたは、奥さんや息子さんの持ち物を、たくさん持ち続けている。
12	1992年2月17日	アムナ・ノーマン	奥さんと息子さんが霊界に行ったのは、crash（乗り物の激突事故、飛行機の墜落）があったからだ。
13	1992年2月17日	アムナ・ノーマン	身内に自殺した人がいる。
14	1992年2月19日	アーマ・ブラウン	誕生日に近い（奥さんの誕生日が2月24日）。
15	1992年2月19日	アーマ・ブラウン	霊界からの奥さんの言葉：娘のことは心配しなくてもよい。（中略）娘には婚約の兆しがある。婚約するだろう。孫たちの姿も見えてくる。（この年の11月に結婚、2005年に双子が誕生。）
16	1993年7月31日	アン・ターナー	あなたの娘さんは子どもができないかもしれないと気にしているが、心配することはない。子どもはふたり生まれる。（cf. 項目15）
17	1993年8月13日	アン・ターナー	あなたの娘さんには、子どもがふたり生まれる。（cf. 項目15）
18	1993年8月17日	アムナ・ノーマン	あなたの娘さんも、知性の高い人だ。子どもはふたり生まれるだろう。（cf. 項目15）
19	2000年6月5日	アン・ターナー	息子さんからのメッセージ：あのときの不安がっていたばくの態度を許してください。（最後の別れの時に飛行機に乗ることに不安を示していたことへの言及）

※事実と若干のズレがあるものについては、補足説明を追加してある。

帰国後、武本氏は東京在住の霊能者からもリーディングを受け、過去生（いわゆる前世）を含む霊的な事項についても学びを深めていくが（武本, 2001, pp. 248-307）、ここでは割愛する。

## 5. Life Changes Inventory-Revised

霊的変容体験そのものは多様であり、現象自体を統一的に測るのは困難だが、体験後の人生観や生き方の変化に焦点を絞れば、その影響を共通の尺度で測ることは可能であり、そのような尺度の一つとしてKenneth RingとBruce Greysonが開発した改訂版人生変化目録（Life Changes Inventory-Revised）がある。これは表2に示した50の項目に対して、Strongly Increased、Increased、No Change、Decreased、Strongly Decreasedの五段階で回答するものである。2020年1月9日、この改訂版人生変化目録に対して、武本氏にweb上で回答していただいた。

表2 Life Changes Inventory-Revisedの各項目

- 
1. My desire to help others has
  2. My compassion for others has
  3. My appreciation for the "ordinary things of life" has
  4. My ability to listen patiently to others has
  5. My feelings of self-worth have
  6. My interest in psychic phenomena has
  7. My interest in organized religion has
  8. My reverence for all forms of life has
  9. My concern with the material things of life has
  10. My tolerance for others has
  11. My sensitivity to the suffering of others has
  12. My interest in creating a "good impression" has
  13. My concern with spiritual matters has
  14. My desire to achieve a higher consciousness has
  15. My ability to express love for others openly has
  16. My insight into the problems of others has
  17. My appreciation of nature has
  18. My competitive tendencies have
  19. My religious feelings have
  20. My spiritual feelings have
  21. My concern with the welfare of the planet has
  22. My understanding of "what life is all about" has
  23. My personal sense of purpose in life has
  24. My belief in a higher power has
  25. My understanding of others has
  26. My sense of the sacred aspect of life has
  27. My ambition to achieve a higher standard of living has
  28. My self-acceptance has
  29. My desire for solitude has
  30. My sense that there is some inner meaning to my life has
  31. My involvement in family life has
  32. My fear of death has
  33. My concern with the threat of nuclear weapon has
  34. My desire to become a well-known person has
  35. My tendency to pray has
  36. My openness to the idea of reincarnation has
  37. My empathy with others has
  38. My concern with ecological matters has
  39. My involvement with my church/religious community has
  40. My interest in self-understanding has
  41. My inner sense of God's presence has
  42. My feelings of personal vulnerability have
  43. My conviction that there is a life after death has
  44. My interest in what others think of me has
  45. My concern with political affairs has
  46. My interest in achieving material success in life has
  47. My acceptance of others has
  48. My search for personal meaning has
  49. My concern with questions of social justice has
  50. My interest in issues relating to death and dying has
-

回答の集計結果は表3に示す通りである。

表3 Life Changes Inventory-Revisedの集計結果

Value Cluster	本調査	Ohkado (2019)	Goza et al. (2014)	Ohkado and Greyson (2018)	Schneeberger (2010)
Total*	0.98	1.1	1.07 (±0.36)	1.13 (±0.55)	NA
Appreciation for Life	1	1.5	0.77 (±1.00)	1.15 (±0.76)	1.28 (±0.38)
Self-Acceptance	1	2.0	0.50 (±0.79)	1.30 (±0.69)	1.14 (±0.63)
Concern for Others	1	1.1	0.43 (±0.86)	1.15 (±0.70)	1.22 (±0.53)
Concern with Worldly Matters	-1	0	-0.25 (±0.57)	-0.36 (±0.86)	-0.48 (±0.53)
Concern with Social Values/Planetary Values	0.6	0	NA	0.38 (±0.68)	0.81 (±0.67)
Quest for Meaning/Sense of Purpose	1	1.5	0.57(±0.91)	1.26 (±0.69)	1.17 (±0.63)
Spirituality	1.4	1.2	0.73 (±0.97)	1.14 (±0.83)	1.16 (±0.70)
Religiousness	0.75	0.5	0.40 (±1.20)	-0.48 (±0.98)	0.01 (±0.92)
Appreciation of Death	1.67	1.3	NA	1.12 (±0.65)	NA
Others	0.6	0.4	NA	NA	NA

表3では、本調査の結果に加え、先行研究における子供が語る胎内記憶によって誘発された霊的変容体験（大門,2018）、臨死体験（Goza et al., 2014）、退行催眠（Ohkado and Greyson, 2018）、神秘体験（Schneeberger, 2010）の数値を挙げてある。表2における各設問の回答の "Strongly Increased" には "2点" が、"Increased" には "1点" が、"No Change" には "0点" が与えられる。一方、"Strongly Decreased" には "-2点"が、"Decreased" には "-1点" が与えられる。Totalは、絶対値のみを考慮した場合の平均点であり、数値は "0" から "2" の間に収まる。Appreciation for Lifeは項目3、8、17、26の平均、Self-Acceptanceは項目5、28、40の平均、Concern for Othersは項目1、2、4、10、11、15、16、25、37、47の平均、Concern with Worldly Achievementは項目9、12、18、27、34、44、46の平均、Concern with Social/Planetary Valuesは21、33、38、45、49の平均、Quest for Meaning/Sense of Purposesは項目22、23、30、48の平均、Spiritualityは項目13、14、20、24、41の平均、Religiousnessは項目7、19、35、39の平均、Appreciation of Deathは項目32（逆転項目）、43、50の平均、その他は項目6、29、31、36、42の平均である。

合計点 (Total)から、他の体験と同様に、体験後の人生観の変化が観察される。また、世俗的な事物への関心（Concerns with Worldly Matters）に関する数値の減少（ただし、胎内記憶によって誘発された霊的変容体験では変化なし）や霊性・人生の意味や目的の探求に関する数値の上昇も他の体験と共通している。また、胎内記憶によって誘発された変容体験および退行催眠時の死の体験同様、死を受け入れる気持ちに関する数値は上昇してい

る。一事例の数値ではあるが、Life Changes Inventory-Revisedが死後交信体験を分析する際のツールとして有効である可能性を示していると言えるのではないかと思う。

## 6. 結語

本稿では霊的変容体験のひとつとして武本昌三氏が著書やwebページで公にしている死後交信を扱った。定量的な分析のツールとして、臨死体験の影響を測る尺度として考案された改訂人生変化目録を用い、それが霊的変容体験という大きな枠組みで死後交信体験を測る尺度として有効に機能しうることを示した。今後もこのような量的なアプローチで死後交信をはじめとする霊的変容体験の分析を進めていきたいが、そのようなやり方では決して捉えることのできない、体験そのものの重みを捉える質的アプローチのあり方についても今後は模索していきたい。

最後に、表3のような数値では表し得ない、武本氏が体験した大きな人生観の変化について、氏自身の言葉（武本, 2011, pp. 310-312）を引用して本稿を終える。

人は死なない。というより、死ぬことができない。愛する家族も死んではいない。いまも生き続けている。話し合えないことも決してない。

ただ、そのことを知らずに、死んだらすべては終わったと諦めて、愛する家族をみずから忘却の彼方へ押し流し、話し合おうとしない人たちが、おびたしくまわりにはいるだけである。（中略）

愛する家族は生きているのに、自分で死んだことにしてしまっていた。元気に、むしろ以前よりはいっそう明るく希望を持って修行に励んでいるのに、勝手に家族を未知の暗黒へ送り込んで、自分自身も生きる気力を失い、暗く沈みこんでいた。（中略）

しかし私は、この無知と愚かさからでも、長い道のりを経て、一筋の光明にたどりつくことができた。本当は、いのちの真理とは、きわめて単純で明快なのだが、そのことを長い間、知らなかった。

やっと、その単純で明快な真理を知ることができて、いまは悲しみも嘆きもない。ここら安らかに幸せな気持ちで生きている。

## 謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです（課題名：「Spiritually Transformative Experienceに関する研究」、承認番号：280114）。調査にご協力いただいた武本昌三先生に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- Beischel, Julie, Chad Mosher, and Mark Boccuzzi (2014) "The Possible Effects on Bereavement of Assisted After-Death Communication During Readings with Psychic Mediums: A Continuing Bond Perspective." *Omega*, 70(2), 169-194.
- Beischel, Julie and Gary E. Schwartz (2007) "Anomalous Information Reception by Research Mediums Demonstrated Using a Novel Triple-Blind Protocol." *Explorer*, 3(1), 23-27.
- Greyson, Bruce and Kenneth Ring (2004) "The Life Changes Inventory-Revised." *Journal of Near-Death Studies*, 23(1), 41-54.
- Clark, Nancy (2012) *Divine Moments: Ordinary People Having Spiritually Transformative Experiences*. Fairfield, IA: 1stWorld Publishing.
- Goza, Tracy H., Janice M. Holden, and Lee Kinsey (2014)
- Gurney, Edmund, Frederic W. H. Myers, and Frank Podmore (1886) *Phantasms of the Living*. 2 vols. London: Trübner.
- Haraldsson, Erlendur and Joop M. Houtkooper (1991) "Psychic Experiences in the Multinational Human Values Study: Who Reports Them?" *The Journal of the American Society for Psychical Research*, 85, 145-165.
- Ohkado, Masayuki and Bruce Greyson (2018) "A Comparison of Hypnotically-Induced Death Experiences and Near-Death Experiences." *Journal of International Society of Life Information Science*, 36(2), 73-77.
- Schneeberger, Susan F. (2010) *Unitive/Mystical Experiences and Life Changes*. PhD. Dissertation, University of Northern Colorado.
- Sudduth, Michael (2016) *A Philosophical Critique of Empirical Arguments for Postmortem Survival*. New York: Palgrave Macmillan.
- Stevenson, Ian (1997) *Reincarnation and Biology: Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects*. Westport, CT.: Praeger.
- Stevenson, Ian (2001) *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation* (Revised Edition). Jefferson, NC.: McFarland & Company.
- Tucker, Jim B. (2005) *Life Before Life: A Scientific Investigation of Children's Memories of Previous Lives*. New York: St. Martin's Press.
- 大門正幸 (2018) 「子供が語る胎内記憶によって誘発された霊的変容体験」『人体科学』27(1), 13-22.
- 大門正幸 (2020) 「『胎内記憶』とそれに関連する言説をめぐって～感情的な反発から理性的で建設的な対案へ～」『人体科学』29(1), 22-31.
- 奥野修司 (2017) 『魂でもいいから、そばにいて—3・11後の霊体験を聞く—』東京：新潮社.
- 金菱清編 (2018) 『私の夢まで、会いに来てくれた—3.11亡き人とのそれから』東京：朝日新聞出版.
- 塩田芳享 (2008) 『再会 死んだ家族にもう一度逢える』東京：文芸春秋.

大韓航空機事件の真相を究明する会・武本昌三 (1988) 『大韓航空機事件の研究』 東京：三一書房.

武本昌三 (1985) 『大韓機撃墜事件—疑惑の航跡』 東京：潮出版.

武本昌三 (2011) 『天国からの手紙—愛する家族との 18 年間の霊界通信』 東京：学研.

武本昌三 (2019) 『生と死の真実を求めて—肉体は滅びても人は生き続ける—』 東京：溝口祭典.

パリー、リチャード・ロイド／濱野大道訳 (2018) 『津波の霊たち—3・11 死と生の物語』 東京：早川書房.

マーチン、ジョエル・ロマノウスキー、パトリシア (糸川洋訳) 『WE DONT DIE (誰も死なない)』 東京：光文社.